

-地域と大学を結ぶ- りえぞん No. 17

編集発行：武庫川女子大学 社会連携推進センター

目次

日本語学校の教室とつなぐオンライン交流会

【 日本語日本文学科 】1P

「第4回歴史文化講座 阪神・淡路大震災以降の文化財保全—守る・つなぐ・活かすひとびと—」を開催

【 歴史文化学科 】1P

MECがペットボトルキャップ回収でプラスチックごみ削減とポリオ撲滅に貢献

【 英語グローバル学科 】2P

地域の子どもたちに学生が算数を個別指導する学習支援ルーム「らび」が活動10年目

【 教育学科 】2P

ボランティアサークル「MUKOnnect」 防災お菓子ポシェットを通して『備え』を考える

【 心理・社会福祉学部 】3P

村越ゼミ・豊永ゼミ考案のフレイル予防動画「ほかほかダンス」が初披露

【 健康・スポーツ科学部 / ダンス部 】3P

生活環境学科の学生が豊中市立グリーンスポーツセンターでカレンダーワークショップを開催

【 生活環境学科 】3P

情報メディア学科の肥後ゼミが尼崎市と協働で若年層向け自殺予防対策動画を制作

【 情報メディア学科（社会情報学科） / 社会福祉学科 】4P

1年生が西宮市の廃棄物処理場・下水処理場で見学実習を実施

【 食物栄養学科 】4P

関西スーパーマーケット×明治関西支社×武庫川女子大学の産学連携企画を実施

【 食創造科学科 】5P

バフチェシヒル大学でアンタキヤの歴史的都市景観の復興を考えるシンポジウムを共同開催

【 建築学部 】5P

浜甲カンタービレが浜甲子園団地自治会主催の文化祭に出演

【 音楽学部 】6P

「音楽活用実習」を受講している応用音楽学科4年生が洲本市でイベントを運営

【 応用音楽学科 】7P

附属保育園で学生たちが5歳児に「カニさん手洗い」を指導

【 薬学科 】7P

紫外線について楽しく学ぶイベント「色が変わるふしぎなスライムを作ろう！」を開催

【 健康生命薬科学科 】8P

『まちの保健室』に多くの地域の人たちが参加

【 看護学科 】9P

高橋ゼミが関西コレクション会場でフェムテック啓発活動を実施

【 経営学科 】9P

ソフトバンクとの産学連携プロジェクト「ふるさと納税返礼品作成による地方創生事業」で、学生たちが開発した返礼品のお披露目を開催

【 経営学科 】10P

石井としろう西宮市長が共通教育科目の授業で講演

【 共通教育部 】11P

甲子園キッズフェスタに空手道部、新体操部、ダンス部、バトン・チアリーディング部が参加

【 学友会 】11P

新たに2つの3者協定を締結。キャリア支援事業における金融機関との提携は3行に

【 リカレント教育センター 】12P

第5回「国際女性デーMUKOJO フォーラム」開催

【 女性活躍総合研究所 】12P

「ドナルド・マクドナルド・ハウス」を支援するため、包括連携協定を締結

【 学院 】13P

チャリティイベント「青いマツクの日」に学生たちがボランティアで参加

【 学院 】13P

鳴尾ふれあいイベントがハロウィンシーズンの10月末、賑やかに開催

【 学院 】14P

「第2回武庫女ビジネスコンテスト」を開催

【 学院 】14P

武庫川女子大学×日清シスコ 未来プロジェクトメンバーが、食育イベントを開催

【 学院 】15P

「阪神・淡路大震災30年 防災シンポジウム～災害を乗り越えていくために～」を西宮市と武庫川学院の共催により開催

【 学院 】15P

第9回研究成果の社会還元促進に関する発表会を開催

【 学院 】16P

「第7回武庫女スマイルフェス」をららぽーと甲子園で開催

【 学院 】17P

参考資料〈持続可能な開発目標（SDGs）の詳細〉 18P

-地域と大学を結ぶ- りえぞん No. 17

編集発行：武庫川女子大学 社会連携推進センター

充実する本学の地域連携活動

本学では、社会連携の活動が次第に数を増し、また継続的な活動も行われています。新しい活動の中には学部の垣根を越えた取り組みも見られます。その中の際立った活動の概要を以下に紹介します。

【 日本語日本文学科 】

日本語学校の教室とつなぐオンライン交流会



野畑ゼミ（野畑理佳准教授）・林ゼミ（林貴哉講師）の合同ゼミは、1月21日にオンライン交流会を実施した。交流相手は大阪国際外語学院で、日本語教員養成課程の教壇実習先としてもお世話になっている。大阪国際外語学院から参加した留学生の出身国はバングラデシュ33名、ミャンマー11名、ネパール10名、ベトナム4名、中国2名。本学からは16名のゼミ生が参加した。

今回はフリートークの時間がないかわりに、グループごとの「クイズ大会」となり、留学生からは、「バングラデシュの1番大きい祭りは何か」「ネパールに世界遺産はいくつあるか」「ミャンマーの水上に暮らす町の名前は」「ベトナムの通貨は何か」「大丈夫の「丈夫」の意味は中国語でどんな意味か」など、国ごとに3択のクイズが出された。武庫女生からは「いいです」「大丈夫です」がOKの意味か断りの意味かを2択で推測するクイズ、また関西弁のクイズを出した。



オンライン交流会の様子

【 歴史文化学科 】

「第4回歴史文化講座 阪神・淡路大震災以降の文化財保全—守る・つなぐ・活かすひとびと—」を開催



2月2日に歴史文化学科主催「第4回歴史文化講座 阪神・淡路大震災以降の文化財保全—守る・つなぐ・活かすひとびと—」を開催した。歴史文化学科1期生のほか、学外も含め約50名の参加があった。

最初に、歴史文化学科河野未央准教授から報告を行った。1995年の阪神・淡路大震災を機に大規模自然災害から民間所在の歴史資料を守るボランティア団体が立ち上がった。その後もボランティアの輪は広がり、特に、東日本大震災以降は、「心の復興」をテーマとして「記憶」「思い出」を守る活動がさらに広がりを見せつつある。報告は、こうした活動を行う「ひとびと」に焦点をあて、紹介した。

続いて、ゲスト・スピーカーの吹田市教育委員会の立岡宏美さんを迎えた対談を行った。

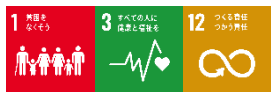
立岡さんは大学生時代に歴史資料を守るボランティアに参加。現在は文化財保護課にて勤務し、旧中西家住宅、旧西尾家住宅等の文化財に関わる仕事をしている。当日はそうした仕事の紹介をはじめ、学生時代の活動と現在の活動とのつながりを紹介。また未来に向けて文化財を守るにあたり、若い世代に知ってほしいとの思いを語った。



ゲスト・スピーカーの立岡さん（左）と河野准教授（右）

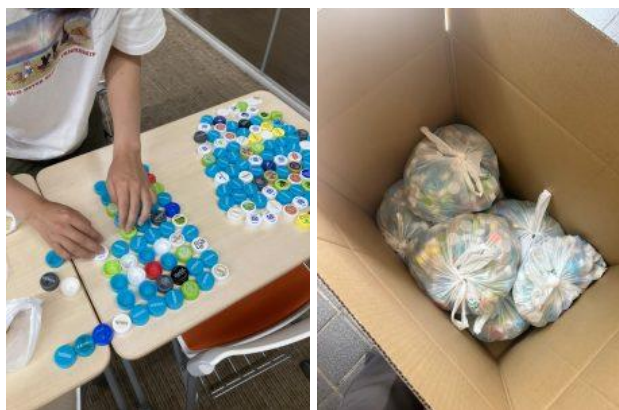
【 英語グローバル学科 】

MEC がペットボトルキャップ回収でプラスチックごみ削減とポリオ撲滅に貢献



大学公認のボランティア団体 MEC（Mukogawa English Community）は、2006 年に結成され、主に英語グローバル学科の学生で構成されている。今回の活動では、3 年生を中心に、合計 3226 個のペットボトルキャップを回収した。

回収したキャップは大栄環境グループを通じて大阪府堺市の工場に送り、プラスチックパレットに再生される。また、再生された原料の相当金額（1kg あたり 15 円）は、JCV（世界の子どもにワクチンを日本委員会）に寄付され、開発途上国の子供たちにポリオワクチンを提供する活動に使われる。このペットボトルキャップ回収活動は、プラスチックごみの削減に貢献すると同時に、ポリオ撲滅に重要な役割を果たしている。



文化祭などでキャップ回収を実施

【 教育学科 】

地域の子どもたちに学生が算数を個別指導する学習支援ルーム「らび」が活動 10 年目



小学校の先生を目指す学生たちが、地域の小学生に算数の個別指導をする学習支援ルーム「らび」が活動 10 年を迎えた。教育学科の神原一之教授が「算数の苦手な子に面白さを知ってもらおう」と、ゼミ生たちと 2015 年後期から取り組み、これまでに延べ約 5000 人の小学生の「算数わかった！」を引き出している。10 月 25 日に 2024 年後期がスタートした。

児童 1 人と「先生」役の学生 1 人がペアを組み、年間 16～20 回の個別指導を行う。年度初めに児童と保護者から学生が聞き取りを行い、神原教授の助言を得て方針を決定し、「前年の復習から始める」「文章題を重点的に」「ケアレスミスを減らす」など、目標を児童とともに立てて学習を進める。

今年度は小学 3～6 年生の児童 26 人に対し、神原ゼミの 3、4 年生と村上ゼミ（村上加代子准教授）の有志を合わせた計 27 人が「先生」として参加。

学生たちは児童の学習進度や性格に合わせ、教科書や市販のドリルのほか、手作りの補助教材等を使って、楽しみながら学習が進むよう工夫を凝らす。

約 1 時間の学習後は全員でレクリエーションを楽しむ。子どもたちが帰った後は、その日の学習の進捗状況や留意点を振り返り、共有する。

学生の多くは小学校教諭や特別支援学校教諭を目指しており、「らび」での活動は、学生にとっても多様な子どもと向き合う学びの場になっている。神原教授は「1 人の子どもの勉強をじっくり見ることで子ども理解が進み、指導力に幅が出ます。教員になった卒業生からは『らび』での経験が生きている、という声が寄せられています」と話している。



学生と児童は隣り合っ机に座り、学習に取り組む



各面に「10 分」「20 分」など書いた手作りのサイコロで時計の計算に取り組むペア

【 心理・社会福祉学部 】

ボランティアサークル「MUKOnnect」 防災お菓子ポシェットを通して『備え』を考える



社会福祉学科の学生が立ち上げたボランティアサークル「MUKOnnect」が、1月11日に尼崎市内の子どもたちと防災士の方、尼崎市社会福祉協議会の方々と、防災お菓子ポシェット作りを行った。

今年は、阪神淡路大震災から30年。いつ起きるか予測できない自然災害について、防災士の方から話を聞いた。

また、防災お菓子ポシェット作りでは、過去に参加経験のある子どもたちが、ポシェット作りの約束である「すぐに食べないで、災害時に食べる」「賞味期限の日を迎えてお菓子を食べられることは幸せなこと」を覚えており、学生たちは伝えていきたいこと『備え』が子どもたちに伝わっていることを実感し、活動を継続する意義を改めて考えることができた。



「防災お菓子ポシェット」はお菓子を詰めたビニール製の手作りポシェット、1日分の非常食になる



防災士の方による講義

【 健康・スポーツ科学部 / ダンス部 】

村越ゼミ・豊永ゼミ考案のフレイル予防動画「ほかほかダンス」が初披露



「第16回介護を考える市民フォーラム in 宝塚：フレイル予防講演会」が12月14日、宝塚市のソリオホールで行われ、健康・スポーツ科学部の村越ゼミ（村越直子教授）・豊永ゼミ（豊永洵子講師）が考案したフレイル予防動画「ほかほかダンス」が初披露された。

当日はダンスクリエイターのSAMさんが指導するダレデモダンスのレクチャーも行われ、参加者とともに本学ダンス部も友情出演し、場を盛り上げた。

この「ほかほかダンス」は宝塚市からの依頼で、村越ゼミの健康・スポーツ科学部3年、井藤真穂さん、同、横畑七菜さんが振付をし、豊永ゼミの同、3年源紗綾さんが動画編集を行った。制作過程において、宝塚市医療助成課からのアドバイスや、ゼミ生の意見も反映している。



ダンス部とダンスクリエイターのSAMさん

【 生活環境学科 】

生活環境学科の学生が豊中市立グリーンスポーツセンターでカレンダーワークショップを開催



豊中市の秋のスポーツフェスタ「グリスポ超GOKIGEN!MAX」が10月26日、豊中市立スポーツセンターで行われ、生活環境学科伊丹研究室（伊丹康二准教授）4年、笹井愛未さんが毎日のスポーツを応援するカレンダーワークショップを行った。

このワークショップは、参加者に、日常的な軽い運動からスポーツトレーニングまで、様々なエクササイズが描かれたカード30種類から7枚を選んでもらい、曜日ごとに違うエクササイズに挑戦するカレンダーを作るというもの。豊中市立スポーツセンターのコンセプト「体を動かしたくなる環境ときっかけを提供する」に対応したもので、競技スポーツだけでなく、「ちょっとしたことで運動になる」というメッセージを込めている。

子どもから大人まで35組55人が参加。人気のあったカードは、1位「お風呂上りにストレッチしよう!」、2位「歯磨きしながらかかとを上げ下げしよう!」、3位「湯船に浸かって正座チャレンジ!」で、家の中で“ゆるっと”体を動かすカードが人気だった。参加者たちはいろんなキャラクターのイラストを楽しみながらカードを選んでいった。



カードに描かれたキャラクターも笹井さんがデザインした

【 情報メディア学科（社会情報学科） ／ 社会福祉学科 】

学部連携

情報メディア学科の肥後ゼミが尼崎市と協働で
若年層向け自殺予防対策動画を制作



情報メディア学科（2023年に社会情報学部社会情報学科に改組）肥後有紀子准教授のゼミ生9人が、

尼崎市との協働で若年層向けの自殺予防対策動画を制作した。動画は8月27日の尼崎市長定例記者会見で公開。記者会見にはゼミを代表し、3年生の國生実里さんが参加した。

このプロジェクトは、尼崎市が夏休み明けの児童・生徒に向けた自殺対策の取り組みとして、2024年の春から始動。プロジェクトには社会福祉学科の大岡由佳准教授がアドバイザーとして参加。市や大岡准教授から提供された資料やSNS上の青少年の声、国内外の啓発動画に関する先行研究をもとに進められた。市との緻密なディスカッションを重ね、約4か月間を掛けて動画を完成させた。

動画は、当事者に向けた『ひとりじゃないよ』と、周囲の人に向けた『あなたの勇気を待っている人がいます』の2本。感情移入がしやすいようにアニメーション動画に挑戦し、ナレーションには放送部や演劇部の学生が参加している。

國生さんは「コンセプトやストーリーづくりのアイデアを考えるときに、方向性がなかなか定まりませんでしたが、尼崎市の担当の方から多くの情報を頂いてから一気に定まりました。視聴者の共感を得られるよう、ビジュアルやテンポの細部にこだわりました」と話した。完成した動画は今後、関連する地域イベントでも活用される予定だ。



肥後ゼミ3年生國生実里さんと尼崎市 松本市長



制作動画『あなたの勇気を待っている人がいます』

【 食物栄養学科 】

1 年生が西宮市の廃棄物処理場・下水処理場で 見学実習を実施



食物栄養学科の全1年生が9月12、13日、西宮市の西部総合処理センター・甲子園浜浄化センターで見学実習を行った。

管理栄養士の必須科目である公衆衛生学実習の一環として、ごみ処理や下水処理の方法を理解することを目的としている。コロナ禍の影響で一時、中止していたが、西宮市の協力を得て昨年度から復活。学生たちは家庭などから出た汚れた水をきれいにし海や川へ流す仕組みを知り、生活の中でごみや汚水をいかに減らすかを考えることが環境保全につながることを学んだ。

西部総合処理センター（廃棄物処理場）では、西宮市の燃えるゴミ、不燃物、ペットボトル、缶などがどのように処理されるかを学んだ。燃えるごみの場合、焼却され、その灰が埋め立てに使用されたり、缶は手選別で処理されたり、リサイクルできる家具や自転車などは市民に無償提供されたりしている。また、ごみを燃やす際のエネルギーは、廃棄物処理場の運転に使用され、余ったエネルギーは電力会社へ販売されている。

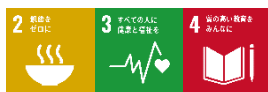
甲子園浜浄化センター（下水処理場）では、雨水処理、下水処理の詳細について、映像を使って説明を受けた後、好気性細菌を使った汚水の分解処理、最終的にきれいになった下水処理水がどのように川まで放流されるかの一連の過程を見学した。



甲子園浜浄化センターでの見学実習の様子

【 食創造科学科 】

関西スーパーマーケット×明治関西支社×武庫川女子大学の産学連携企画を実施



関西スーパーマーケット、明治関西支社、武庫川女子大学の産学連携コラボで、食創造科学科4年の学生たちが関西スーパー鳴尾店で、明治の乳製品を使ったレシピの試食配布を行った。

本学と関西スーパーマーケット、明治関西支社との産学連携の取り組みは、食産業に関する企業、生産・研究の現場を見学したり体験したりして、さまざまな職業や職種を理解し、キャリア意識を形成すること、また、産学連携によって学生が実践力を身につけ、市民の健康へ貢献することを目的に、2023年度から始めた。

関西スーパー鳴尾店でのレシピの試食配布は、10月22日から11月1日のうち5日間行われ、学生たちが自ら考案したレシピを調理してお客に直接、ふるまった。

考案したレシピは、いずれも明治の牛乳やチーズを使用した「たっぷり秋野菜ときのこのチーズタッカルビ」、「かぼちゃのグラタン」、「おばけチーズミートドリア」、「さつまいもチーズガレット」、「チーズロールキャベツのトマト煮」、「鮭の洋風ちゃんちゃん焼き」、「さつまいもと舞茸のチーズ焼き」、「アボカドとサーモンのグラタン」。

参加した学生たちは「レシピを考えるだけでなく、直接、お客さまの反応を見ることができて、とてもためになり良かった」と話していた。



「たっぷり秋野菜ときのこのチーズタッカルビ」試食配付の様子

【 建築学部 】

バフチェシヒル大学でアンタキヤの歴史的都市 景観の復興を考えるシンポジウムを共同開催



トルコの歴史都市アンタキヤの町並み復興に取り組んでいる建築学部が11月7日、トルコ・バフチェシヒル大学でシンポジウム「アンタキヤの歴史的都市景観の復興」を日本の文化庁や同大学と共同で開催。2024年3月に示した“復興に向けた9つの提案”に基づくプロジェクトの成果を発表した。

建築学部は学生の交換留学や過去の災害における調査・支援等でトルコとのつながりが深く、2023年2月のトルコ地震では、発生直後から教員が被災地に入り、調査や復興に向けた提言を行ってきた。令和5年度緊急的文化遺産保護国際貢献事業（専門家交流）「トルコ共和国における歴史的市街地の復興に関する国際貢献事業」を文化庁から受託し、その一環として2024年3月に甲子園会館で開催した公開セミナーでは、復興に向けた9つの案を提言。さらに同4月、令和6年度文化遺産保護国際貢献事業（文化遺産国際協力拠点交流事業）「トルコ共和国における歴史的市街地の復興に関する拠点交流事業」を文化庁から受託し、バフチェシヒル大学とともにアンタキヤ旧市街の復興都市デザインを提案する拠点交流プロジェクトに取り組んでいる。これまでにアンタキヤで両大学の教員らが現地調査ワークショップを実施したほか、9月には本学で「復興都市デザインスタジオ」と称し、アンタキヤ旧市街の模型を作成し、復興都市デザインを考えた。

今回のシンポジウムはこうした一連の取り組みの成果発表として開催した。会場には約50人が参加し、在イスタンブール日本国総領事館の笠原謙一総領事も駆けつけた。冒頭、バフチェシヒル大学建築デザイン学部のムラツ・ドゥンダル教授が挨拶に立ち、2大学間のこれまでの交流について紹介した。続いて武庫川女子大学建築学部の柳沢和彦教授がプロジェクトの経緯について総括した。

バフチェシヒル大学のシネム・キュルトウル准教授は、アンタキヤの住民に対するアンケートで434人の回答があり、うち98%が復興に向けた9つの案

を評価していることを明らかにした。また、「復興都市デザインスタジオ」に参加し、アンタキヤ旧市街の復興都市デザインの提案に携わったこと、世界の最先端をいく日本の地震関連実験施設を視察したことを報告した。

さらに、武庫川女子大学の山本親教授、鳥巢茂樹教授が、「復興都市デザインスタジオ」で作成したアンタキヤ旧市街の復興都市デザインを発表した。山本教授は建築設計の立場から、復興に向けた9つの提案に基づいて作成されたアンタキヤ旧市街の復興都市デザインの動画を披露。鳥巢教授は建築構造設計の立場から、アンタキヤの都市景観の復興に欠かせない住宅の耐震化の提案を行った。



ムラツ・ドゥンダル教授 開会挨拶



柳沢教授 これまでの経緯について説明

【 音楽学部 】

浜甲カンタービレが浜甲子園団地自治会主催の 文化祭に出演



10月27日に開催された浜甲子園団地自治会主催の文化祭に浜甲カンタービレの14名の学生が出演し、ミュージカルナンバーを披露した。

大学の文化祭で上演した 2 年生ミュージカルからの曲目もあり、華麗に歌い踊った。会場はお客様からの手拍子もあり、大いに盛り上がった。



浜甲団地文化祭でのステージ



音楽学部 of 学生有志によるボランティア団体「浜甲カンタービレ」

【 応用音楽学科 】

「音楽活用実習」を受講している応用音楽学科 4 年生が洲本市でイベントを運営



12 月 22 日、「音楽活用実習」受講生が後期に取組んだイベント「MuKoJo の音活 at S BRICK」が淡路島洲本市の S BRICK で開催された。

当日は寒い中多くの来場があり、洲本吹奏楽団やスーパーキッズ・オーケストラをはじめとした演奏を楽しまれた。このほか、クリスマスマーケットやワークショップ（洲本実業高校書道部による書道体験）も実施した。

前期のイベントを経て後期から計画を進め、洲本市や洲本市教育委員会をはじめ、多くの方のご支援やアドバイスを受けて準備し、現場での得難い経験と学びを得た 1 日となった。



当日は受付やイベントの司会を務めた



スーパーキッズ・オーケストラによる演奏

【 薬学科 】

附属保育園で学生たちが 5 歳児に「カニさん手洗い」を指導



衛生的な手洗い教材の開発に取り組む薬学科臨床製剤学研究室（吉田都教授）のゼミ生 7 人が 1 月 17 日、武庫川女子大学附属保育園でオリジナルの「カニさん手洗い」を指導した。

「カニさん手洗い」は同研究室が開発し、11 月に日本医療薬学会で発表したオリジナルの手洗い教材。両手をカニに見立て、カニが体を洗うイメージで、歌を歌いながら指先や指の間まで洗い上げる。

保育園での実践指導は昨年 10 月以来、2 度目。今回は 5 歳児 20 人に被験者になってもらい、「手洗い前」と「手洗い後」の汚れの付着を写真に撮って手洗い効果を確認するなど、データ収集も行った。

園児たちは、手洗いクリームの入ったコップに好きな色素を加えてかき混ぜる。これを両手首までし

っかり伸ばし、「カニさん手洗い」で洗い流す。

「カニさん手洗い」は「みぎてだして、ひだりてだして、かにさんこんにちは、せっけんあわあわ、おなかをすりすり」と全体を洗ったあと、「お父さんくるくる、お母さんくるくる」と指1本1本を洗う。

学生たちは子どもたちが進むルートを机で作り、着衣、色素混合、撮影、手洗いなど、ポイントごとに担当を配属。子どもたちが保育室に入ってくると、間隔をあけて2人ずつ呼び込み、白衣を着たり、好きな色素を加えたりするのを手伝った。

吉田教授は「薬剤師は薬の知識だけでなく、それを患者さんに伝えるコミュニケーション能力も大切なので、園での実践は貴重な経験。子どもたちも協力的で楽しくできました」と話していた。



カニさん手洗いを実践する園児



手洗いクリームと色素を混ぜたら、手に塗り「汚れ」に見立てる

【健康生命薬科学科】

紫外線について楽しく学ぶイベント「色が変わるふしぎなスライムを作ろう！」を開催



健康生命薬科学科皮膚生理学研究室（仁木洋子准教授）の学生たちが紫外線について楽しく学ぶイベント「色が変わるふしぎなスライムを作ろう！」を8

月6日、ららぽーと甲子園で開催し、64人の子どもたちが参加した。

このイベントは幼稚園・小学生対象に、MUKOJO ミライ☆ラボとして開催している。スライムを使って紫外線について楽しく学ぶイベントで、紫外線の皮膚・毛髪への影響を研究している皮膚生理学研究室の仁木准教授が紫外線のメリット・デメリットを伝えながら、遊びを通して子どもたちに理科に興味を持ってもらおうと、毎年夏休みに行っている。

学生たちは太陽の光に含まれる紫外線は、当たりすぎると皮膚のダメージにつながったり目を傷めたりするデメリットがある一方、骨を丈夫にするメリットもあることを紙芝居で紹介。その後、子どもたちと一緒に水のりとホウ砂を混ぜてスライムを作り、UVライトを当てることによって色が出てくる絵の具を混ぜた。子どもたちはライトの紫外線で紫色に変化するスライムに大喜び。「すごい！」「外でもう1回遊びたい」などの声が上がっていた。

今回のイベントに参加した皮膚生理学研究室の健康生命薬科学科4年、松田梨沙さんは「子どもたちがいっぱい来てくれて良かったです。今回のイベントをきっかけに、興味を持ってもらえたらうれしいです」と話した。



学生の紙芝居で紫外線について学ぶ子供たち



UVライトを当てたスライム

【 看護学科 】

『まちの保健室』に多くの地域の人たちが参加



看護学科が『まちの保健室』を8月7日、ららぽーと甲子園で開催し、多くの地域の人たちが参加した。

『まちの保健室』は心や身体に関する気がかりや不調などを看護職に気軽に相談できる場として全国各地で行われている。本学では西宮市に住む人々に健康について考えるきっかけになることや学生の看護に関する視点を幅広くすることを目的に毎年2回、兵庫県看護協会と連携して実施している。

7日は看護学科の学生、大学院生、教員、西宮市の保健師、西宮市薬剤師会の薬剤師の34人が参加。5年ぶりに学生ボランティアも参加した。当日は専用の機械を使って血管年齢や骨の健康度、血圧を測定。その後、その結果をもとに自身の健康上の気になることを話し、看護師や保健師の資格を持つ教員が会話を重ねながらアドバイスした。学生たちは受付や測定の補助などを担当。希望者には普段飲んでいる薬などの悩みについて聞くことができる『お薬相談』も行った。



血圧測定をサポートする学生



『お薬相談』も実施

【 経営学科 】

高橋ゼミが関西コレクション会場でフェムテック啓発活動を実施

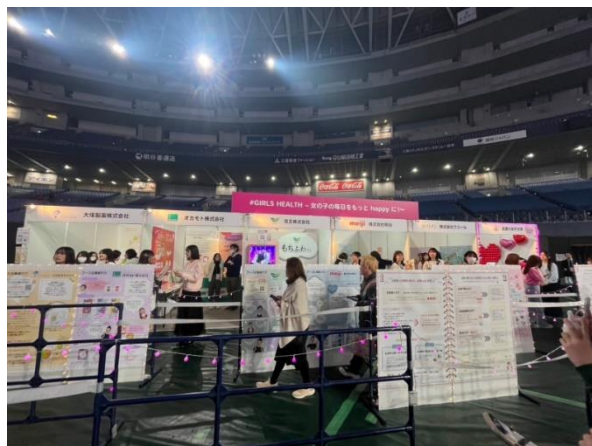


経営学科高橋千枝子教授のゼミが、3月2日、京セラドーム大阪で開催されたファッションイベント「KANSAI COLLECTION」で、フェムテック先進企業5社とコラボレーションした、Z世代女子対象のフェムケア啓発活動を行った。この活動は大塚製薬株式会社、オカモト株式会社、花王株式会社、株式会社明治、株式会社ワコールの5社と協働し、Z世代女子のためのフェムテック・フェムケア啓発プロジェクト「#GIRLS HEALTH～女の子の毎日をもっと Happy に！～」として実施したもの。高橋ゼミではZ世代女子の心と身体の悩みのアンケート分析や、参画企業からの女性の健康管理に関するレクチャーを受講し、情報発信などに取り組んできた。

ゼミ生たちはフェムテック・フェムケアの啓発冊子『フェムケアブック』を作成。参画企業のリーフレットやサンプルとともに「フェムケア啓発セット」として、会場入口で先着15,000人に配布した。

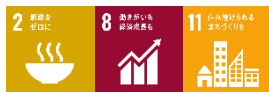
特設ブースは高橋ゼミと参画企業5社を一行につなげ、来場者が全ブースを回れるように工夫を凝らした。誘導路にゼミ生が作成した啓発ポスターを掲示したり、全ブース回った参加者はプレゼント抽選ができるようにしたりした。

高橋ゼミのブースでは女性の健康年表や、本学女性教員による啓発ポスター、ゼミ紹介ポスターなどを掲示。各参画企業はパネル・動画などで情報発信、フェムケア商品の紹介やサンプリングを行った。



「#GIRLS HEALTH～女の子の毎日をもっと Happy に！～」ブース

ソフトバンクとの産学連携プロジェクト「ふるさと納税返礼品作成による地方創生事業」で、学生たちが開発した返礼品のお披露目会を開催



ソフトバンク株式会社（以下「ソフトバンク」）との産学連携プロジェクト「ふるさと納税返礼品作成による地方創生事業」で、経営学科の学生が商品開発に取り組んできたふるさと納税返礼品が完成し、12月3日、「3自治体（三重県多気町、和歌山県みなべ町、北海道北広島市）ふるさと納税返礼品開発お披露目会」が開かれた。12日には、ソフトバンク本社で開催された「ソフトバンク社会貢献プログラム産学連携プロジェクト」のシナジーミーティングで学生たちが成果発表を行った。

学生たちは、ソフトバンクからサステナビリティや生成AIの活用について学び、ふるさと納税返礼品に力を入れている三重県多気町などでフィールドワークを行って商品開発に取り組み、地域の自治体、高校、企業と連携して、返礼品の完成（製品化）を目指した。多気町には提案の中から、3種類7品目の返礼品が採用された。

学生たちは、地域のフィールドワークを行う中で、地域の課題を見つけた。多気町で特産の次郎柿の収穫体験を提案した経営学科3年の新井紫タさんは「多気町で名産品を調べる際、特産の次郎柿の収穫シーズンは収穫する人手が足りず深刻な問題になっていること知り、収穫体験という『体験型』の返礼品を提案した」と話した。



次郎柿など3自治体の特産品やこれまでの活動内容を展示

ソフトバンク HP にも掲載されました！（2025-03-05）
以下転載

（https://www.softbank.jp/sbnews/entry/20250305_01?page=02#05）

【武庫川女子大学】生成AIを活用したふるさと納税返礼品の商品開発

兵庫県西宮市にある武庫川女子大学とソフトバンクは、地域の自治体や企業、高校と連携してふるさと納税の返礼品を開発しました。ソフトバンク社員からサステナビリティや生成AIの活用について学んだ後、ふるさと納税返礼品に力を入れている地域の特産品から新しい返礼品を考案。生成AIを使って自治体向けの提案資料や返礼品の魅力を伝えるパンフレットを作成しました。また各自治体の担当者から話を聞いたり実際に現地に足を運ぶことで、地域のニーズに応じた商品の開発を進めました。

三重県多気町の特産物である「次郎柿」を収穫できる体験型の返礼品など、3種類7品目の返礼品が採用されました。



【 共通教育部 】

石井としろう西宮市長が共通教育科目の授業で講演



共通教育科目「まちづくりと地方自治の役割」の授業が10月28日、中央キャンパスで行われ、西宮市の石井としろう市長が講演した。

石井市長は講演で、大阪と神戸の中間に位置し、文教住宅都市として発展してきた西宮市の歴史をたどった。コンビナート誘致に反対した住民運動によって豊かな自然環境が守られたことや、阪神・淡路大震災からの復興の経緯、住民による地域の約束「共助」の重要性を講演した。また、甲子園球場を活用した小学校・中学校の連合体育大会や「二十歳のつどい」（旧成人式）など西宮市独自の行事が行われていることを紹介し、西宮のまちの魅力を語った。

西宮市は来年、市制100周年を迎えるのを前に、財政構造改善を進めながら、県市統合病院（仮称）西宮総合医療センターやJR西宮駅南西地区第一種市街地再開発事業などの大きな公共投資にも挑戦している。石井市長は、「憩いと安住のまちづくりを目指し、持続可能な文教住宅都市としての取り組みを進めています」と、未来への展望についても話した。

受講した約160人の学生たちからは「住民の暮らしやまちづくりを支える市役所の役割への理解が深まりました」、「西宮市の魅力さらに知ることができました」、「私もまちづくりの担い手になりたいと思いました」などの感想が寄せられた。



講演する石井市長

【 学友会 】

甲子園キッズフェスタに空手道部、新体操部、ダンス部、バトン・チアリーディング部が参加



阪神甲子園球場やその周辺（甲子園駅前広場、三井ショッピングパークららぽーと甲子園など）で「甲子園キッズフェスタ～2024 Vol.2～」(主催：阪神甲子園球場、共催：スポーツを核とした甲子園エリア活性化推進協議会、阪急阪神ホールディングス株式会社)が9月21日に開催され、学友会運動部の空手道部、新体操部、ダンス部、バトン・チアリーディング部4団体が参加し、阪神甲子園球場に集まった子どもたちのイベントを盛り上げた。

当日はイベント全体で約13,000人の来場者があり、ダンス部とバトン・チアリーディング部は、阪神甲子園球場とららぽーと甲子園の特設ステージでパフォーマンスを披露。ダンス部は来場した子どもたちへのダンスレッスンも行った。

空手道部と新体操部は、甲子園駅前広場で、西宮スポーツセンターと共催でミニ体験教室を開催。子供たちに空手、新体操をレクチャーした。すべての回で定員がいっぱいになるほどの人気で、部員の学生は笑顔で子どもたちに接しながら各競技の面白さを伝えた。

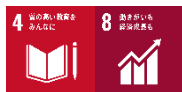
本学は「スポーツを核とした甲子園エリア活性化推進協議会」の構成員として、甲子園エリアの交流人口増加と地域活性化を目的に、スポーツやアウトドアを楽しめる環境整備やスポーツの活性化に産官と連携して取り組んでいる。



空手道部のミニ体験教室

【 リカレント教育センター 】

新たに2つの3者協定を締結。キャリア支援事業おける金融機関との提携は3行に



武庫川女子大学は2023年4月、西宮北口キャンパスにリカレント教育センターを設置し、リカレント教育プログラム「MUKOnoa+（ムコノアプラス）」を開講。社会人向けに、リスキリングプログラムやキャリア支援を提供している。

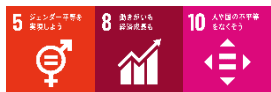
今回、キャリアアップや多様化するキャリア志向に対し、求人ニーズの質および量をともに充実させ、より多くの人材マッチングを実現させるため、10月23日に武庫川女子大学、株式会社ワークアカデミー、株式会社池田泉州銀行は「リカレント教育に伴うキャリア支援事業における3者協定」を締結、さらに12月1日付で、武庫川女子大学、株式会社ワークアカデミー、株式会社みなと銀行が同様の3者協定を締結した。

池田泉州銀行は、地域有数の金融機関として取引先企業との強固なネットワークを有し、また、いち早く人材紹介事業に本格参入している。経営幹部・管理職人材、グローバル人材に強みを持つ池田泉州銀行と、次代を担う若年層に強みを持つ「MUKOnoa+」の連携は、今後、より幅広い中堅・中小企業の人材ニーズに応えていくことが可能になると考えている。

みなと銀行は、すでに3者協定を締結しているりそな銀行のグループ企業であり、兵庫県内でトップレベルのメインバンクシェアを有し、県内における幅広いネットワークを維持している。今回の連携では、大学が所在する兵庫県の求人企業と相談者の人材マッチングに注力するとともに、企業ならびに地域経済の活性化に貢献することが期待される。

【 女性活躍総合研究所 】

第5回「国際女性デーMUKOJO フォーラム」開催



第5回「国際女性デーMUKOJO フォーラム」（女性活躍総合研究所主催）が3月8日に開催された。

第1部では、本学の郡千寿子先生（副学長・文学研究科長・文学部長）が「日本語の歴史から見た女性活躍」と題して、基調講演を行った。

前半では、自身の過去の経験と学びについて、後半は専門の研究である言語学、日本語学の観点から、日本語の文字の成り立ちや、漢字（男性文字）とひらがな（女性文字）が融合し、それぞれの働きを生かしている日本語表記体系は理想的な形であることを現代の男女共同参画時代と重ねて語った。

第2部では、「つかみたい未来—わたし（たち）のキャリアデザイン—」をテーマに募集したエッセイの中から、入賞者3人が登壇。スピーチで最終審査に臨み、最優秀賞に大学院日本語日本文学専攻の白木由美香さんが選ばれた。

受賞者と作品タイトルは次のとおり。

- ・奈良女子大学文学部 田邊瑤子さん（優秀賞）
「低め安定、あるいは低空飛行。もしかすると、一寸先の未来図。」
- ・武庫川女子大学附属中学校 岩浅乃唯さん（優秀賞）
「私の道」
- ・武庫川女子大学大学院文学部研究科日本語日本文学専攻 白木由美香さん（最優秀賞）
「エンプティ・ネスターのキャリアデザイン」



受賞者3名と集合写真



第1部郡副学長による基調講演

【 学院 】

・「ドナルド・マクドナルド・ハウス」を支援するため、包括連携協定を締結



武庫川女子大学は、病気療養で入院や通院をする子どもに付き添う家族の滞在施設「ドナルド・マクドナルド・ハウス」を全国で展開する「公益財団法人ドナルド・マクドナルド・ハウス・チャリティーズ・ジャパン」、兵庫県でマクドナルド店舗を展開する「日本マクドナルド株式会社フランチャイジー 有限会社ステイブル」との間で包括連携協定を締結することとなり、10月8日、締結式を行った。協定締結により、「ドナルド・マクドナルド・ハウス」を通じた病気の子どもとその家族の支援をはじめ、様々な課題解決を担える人材の育成、研究力の向上や地域貢献を3者が連携して目指す。

本学では経営学科が、2022年度からマクドナルドと「サステナビリティ人材育成」のための産学連携プロジェクトに取り組んでいる。今年度から兵庫県で唯一の「ドナルド・マクドナルド・ハウス 神戸（神戸ハウス）」への支援を視野に、関係者から講義を受けるとともに、「神戸ハウス」の見学、マクドナルド店舗での研修等に学生が参加。附属高校の生徒や近隣の高校にもプロジェクト参加の動きが広がっており、全学的な取り組みに発展させようと、今回の協定締結に至った。

10月20日を中心に全国のマクドナルド店舗で行われるチャリティイベント「青いマックの日」には、学生たちも参加し、募金を呼びかける。



左から瀬口学長、公益財団法人ドナルド・マクドナルド・ハウス・チャリティーズ・ジャパンの岩中督理理事長、日本マクドナルド株式会社フランチャイジー 有限会社ステイブルの田中久則代表取締役

高大連携

・チャリティイベント「青いマックの日」に学生たちがボランティアで参加



「ドナルド・マクドナルド・ハウス」を支援するチャリティイベント「青いマックの日」が10月20日を中心に全国のマクドナルド店舗で行われ、経営学科の学生や附属高校生らがボランティアで店頭に立ち、募金を呼びかけた。

協定締結後、初の「青いマックの日」となったこの日、学生たちは阪神間の約30店舗に分かれてチャリティ活動に従事した。

尼崎市のつかしん店では、経営学科の学生たちが、青いジャンパー姿で店頭やイベント広場に立ち、募金を呼び掛けた。店舗周辺には、関連イベントの人氣も相まって家族連れが次々と訪れ、学生たちは笑顔で募金を受け取ったり、青い風船を子どもたちにプレゼントしたりしていた。

経営学科1年の浅井心咲さんは「小さい子どもたちと触れ合えて新鮮でした。誰かのためになっていると思うとうれしく、参加して良かったと思いました」と話していた。



つかしん店イベント広場での募金活動



ドナルド・マクドナルドのイベント

・鳴尾ふれあいイベントがハロウィンシーズンの10月末、賑やかに開催



地域と武庫川女子大学、企業とがつながって地域活性化を目指すイベント「鳴尾ふれあいイベント2024」（鳴尾エリアマネジメント連絡会主催）が10月27日、阪神電車「鳴尾・武庫川女子大前」駅前ひろばを中心に開催され、多くの人でにぎわった。

企画・運営を担う学生実行委員会は本学の学生を中心に、関西学院大学、園田学園女子大学、大手前大学、和歌山大学の学生たちとともに構成し、学生主体のイベントとして定着してきた。学校法人武庫川学院、阪神電気鉄道株式会社、(株)ライフイノベーション、(株)ライフ、(株)みなと銀行、(株)阪神ステーションネットが運営をサポートしている。

駅前ひろばでは、放送部の司会により、書道部やダンス部のパフォーマンス、吹奏楽やバンドのライブ演奏のほか、ハロウィンにちなんだ仮装イベントも行われた。また、武庫女ステーションキャンパスでは、ゲームやウォールアートを楽しむ「わくわく!!ハロウィンチャレンジ」に幼稚園児から中学生までの子どもたちが参加。地域を巡るガイドツアー「知って楽しもう鳴尾！」では、本学の手工芸部体験や、鳴尾八幡神社でお参りの作法や歴史を知る企画が人気を集め、食物栄養学科の教員や学生が栄養バランスをチェックし、食事のアドバイスをを行う「サッと！楽しく栄養チェック」では、親子連れなどが楽しみながら栄養について学んだ。



「わくわく!!ハロウィンチャレンジ」会場の様子

・「第2回武庫女ビジネスコンテスト」を開催



「第2回武庫女ビジネスコンテスト」（社会連携推進センター主催、女性活躍総合研究所共催）の提案者発表・最終審査・表彰式が11月16日に実施され、食創造科学科1年和佐歩乃歌さんと二岡美紅さんの提案「OshiHub ～あなたの推し活をもっと楽しく、安全に～」が優秀賞を、情報メディア学科3年西山凜さんと徳山華菜さんの提案『デジタルサポート事業「ぼけっとケア」』がSOAR賞を受賞した。

このコンテストは学生の起業マインドを育み、学生が持つ能力やスキルを生かして起業を喚起しようと実施している。今回のテーマは「自分のわがままをビジネスにする」。優秀賞の「OshiHub ～あなたの推し活をもっと楽しく、安全に～」は、好きなアイドルやアーティストなど様々な「推し」と交流するために、安全に推し仲間を見つけられるコミュニティアプリ「OshiHub」の開発を企画。段階的なビジネスの成長を想定したアプリ機能の提案を行った。

審査は本学教員の他、外部審査員として卒業生、阪神電気鉄道株式会社、株式会社みなと銀行が加わって行われた。審査員の1人で、椅子張り工房「Revery Chair」を起業する新子真希さん（生活環境学科2007年卒業）は、「学生時代からビジネスマインドを育てるという思いに共感しました。私自身も今回のテーマである『わがまま』を『熱意』に代えて、やりたいことを選択して起業しました。資金の調達など現実的な問題で揺れ動くこともあります。皆さんも熱意を持ってやりたいことに励んでいってください」と学生たちを激励した。



優秀賞を受賞した「OshiHub」の提案プレゼンテーション

・武庫川女子大学×日清シスコ 未来プロジェクトメンバーが、食育イベントを開催



武庫川女子大学×日清シスコ 未来プロジェクトメンバーが、幼稚園児と保護者を対象に食育イベントを開催した。

今回の食育イベントは、「幼稚園児が、『食』に興味を持つきっかけに～“食べる”って楽しいし、大切なこと。～」をコンセプトに企画。「自分だけのまぜませシリアルを作ろう！」と題し、園児たちが自分で用意し、自ら進んで食べる体験ができるように、準備や工夫を重ねた。

イベントでは、シリアルや朝ごはんの大切さについて学ぶクイズを実施。その後、9種類のシリアルの中から好きな味のシリアルを4種類まで選んで、楽しそうに混ぜる園児の姿が多くみられた。混ぜたシリアルに牛乳を注いで食べると「美味しい！」の声が飛び交った。

プロジェクトに参加した食物栄養学科3年の山本玲生さんは、「参加するまでは緊張しましたが、子どもたちが「ありがとう」と言ってくれて感動しました。次回もぜひ参加したいです」と語った。



自分で好きな味のシリアルを選ぶ園児



シスコエン坊やも登場

・「阪神・淡路大震災 30 年 防災シンポジウム～災害を乗り越えていくために～」を西宮市と武庫川学院の共催により開催



阪神・淡路大震災から30年の節目に、改めて災害から学び、災害に備えようと「阪神・淡路大震災 30 年 防災シンポジウム～災害を乗り越えていくために～」(主催：西宮市、武庫川学院 共催：鳴尾連合自治会、日本災害医療薬剤師学会)が2月8日、武庫川女子大学で開催され、約300人が参加した。

開会に先立ち、音楽学部の学生が「しあわせ運べるように」などを合唱。西宮市の石井登志郎市長が「30年は長いようで昨日のことに思われる。震災の教訓を学び合いながら私たち自身が防災、減災の心合わせをする機会にしたい」、瀬口和義学長が「30年が経過し、震災の体験と教訓を伝えていく責任を感じている。防災意識を高めたい」と挨拶した。

第1部では、兵庫県元知事で公益財団法人ひょうご震災記念21世紀研究機構特別顧問の井戸敏三さんと京都大学防災研究所の矢守克也副所長が基調講演。井戸さんは震災の翌年に県副知事に就任し、後に県知事として震災復興に尽力した。「創造的復興」という目標を県民と共有し、10年先の復興計画を作り上げ、実践したことや、東日本大震災の被災地に、カウンターパート方式で支援を行ったことを振り返り、南海トラフ地震への備えとして「復興計画や支援の受け方を事前に想定しておくことが重要」と呼び掛けた。

矢守副所長は「安心して逃げることができる社会を作る」と題し、避難訓練について提言。通常の避難訓練は、いわゆる避難行動要支援者や働き盛りの人が参加しづらいなどやり方に問題があると指摘し、高知県の四万十町や京都府福知山市観音寺地区での新たな取り組みを挙げながら、「訓練へのハードルを下げることを考えるべき」と提言した。

第2部では、石井市長がコーディネーターとなって、パネルディスカッション「自主的な避難生活の心得」を行った。日本トイレ研究所代表の加藤篤さんは「避難所のトイレ問題」について様々な課題を挙げ「まずは携帯トイレを人数×5回×3日分用意し

て」と呼び掛け、日本災害救援ボランティアネットワーク元研究班の八ツ塚としえさんは阪神・淡路大震災でモデル避難所と称された西宮市立安井小学校で主に体育振興会のメンバーが避難所運営に当たったことを振り返り、「日ごろから楽しみながら地域のひとと地域を知る活動が結果的に防災につながる」と語った。

武庫川女子大学薬学部の大川恭子教授は日本災害医療薬剤師学会副会長の立場から「中学校や高校に配置されている学校薬剤師は学校のことをよく知る存在。平時から自助としての準備が大切」、元西宮市消防局長で、震災当時は部長だった鳴尾連合自治会長の川崎洋光さんは消防団と連携して救助や消火にあたった緊迫の状況を振り返り、コミュニティーの大切さを訴えた。

講堂ロビーでは薬学部の学生によるハンドマッサージや非常食・防災食、段ボールベッド、簡易トイレなど、様々な防災グッズの紹介が行われた。



第2部パネルディスカッションの様子

・第9回研究成果の社会還元促進に関する発表会を開催



本学の研究成果を広く発信し、実活用につなげる「研究成果の社会還元促進に関する発表会」（社会連携推進センター主催、研究推進センター共催）が2月10日、公江記念館大講義室で開催され、教員・研究員延べ10人が発表した。

学内外から対面・オンライン合わせて60人が参加。発表会後の異文化交流カフェ（女性活躍総合研究所

主催）では、教員の研究に質問が相次ぎ、本学の研究力への期待の高さが感じられた。

発表者と発表内容は下記のとおり。

◆経営学科 藤井善仁助教

「地域の復興プロセスにおけるジェンダー・ギャップの実態調査」

◆英語グローバル学科 田中真由美教授

「CLILを活用した工学系英語教育に関する研究成果の社会還元」

◆薬学科 堀山志朱代講師

「アルド・ケト還元酵素標的治療薬の迅速かつ確実なスクリーニング開発」

◆日本語日本文学科 設楽馨准教授

「子ども食堂の交流拠点機能」

◆英語グローバル学科 三宅弘晃准教授

「ビジネス英語教育モデルの構築・自学自習の実態と方法の検討」

◆研究推進センター 辻和成研究員（名誉教授）

「組織の英語ニーズに基づくビジネス英語教材の開発と実践例」

◆社会連携推進センター 大坪明特任教授

「コロナ明け直後の武庫川団地住民の社会的孤立に関する考察」

◆看護学科 藤田優一教授

「こどもの入院時の付き添いに関する実態調査」

◆英語グローバル学科 三宅弘晃准教授

「関西の女子大学 2024 年度シラバスに見られる HIV/AIDS 教育の現状」

◆生活環境学科 澤渡千枝教授

「バクテリアセルロースの物性改良による生活素材化の提案」



発表会の様子

・「第7回武庫女スマイルフェス」をららぽーと甲子園で開催



学生たちがワークショップや展示で日ごろの取り組みの成果を発信する「第7回武庫女スマイルフェス」（武庫川女子大学主催、三井不動産株式会社協賛）を2月15日～16日、ららぽーと甲子園で開催。今年はゼミやボランティア団体など10団体が参加し、ブースを開設した。

1階では、ブラウンライスボランティアが国連WFPと連携して世界の食糧支援に取り組む活動をパネルで紹介するとともに、そろいのオレンジ色のTシャツ姿で募金を呼びかけた。また、社会情報学科（※）2年の大森プレゼミと平井クラスがワークショップを開催。大森プレゼミのお菓子を使ったオリジナルブーケづくりでは、子どもたちがミニサイズの袋菓子6袋を選び、茎に見立てたストローに貼り付けて花束を作った。また、大阪・関西万博で実施予定の「お菓子のおみくじ」も同時開催。親子連れが大吉ならぬ「大甘」「大辛」などと書かれたおみくじを引いて楽しんだ。

平井クラスの「手作りプラネタリウム」のワークショップでは、半円形の画用紙の一部を星形やハート形にくりぬいたキットに子どもたちがセロハンを貼り付け、暗室で光を当てて投影を楽しんだ。

2階では生活環境学科の池田ゼミが「毛糸であそぼう！ポストカードとゆびあみ」として、毛糸や端切れを組み合わせたカードづくりなどを実施。また、情報メディア学科（※）3年和泉ゼミは「親子で楽しむ☆わくわくワーク」としてモールを使って人形（モールドール）を作ったり、ホイルカーテンを使った光るキラキラレインボースティックを作ったり。情報メディア学科（※）3年の井上ゼミは夜間の交通事故を減らすため、反射板の普及活動の一環として反射材を使ったオリジナルリフレクターバックづくりに取り組んだ。

このほか、学生広報スタッフが「学生目線でみる武庫女の魅力！」としてパネル展示。健康・スポーツ科学科中堀ゼミが乳がんの早期発見を呼びかける啓発活動として缶バッジを作るワークショップを実

施。16日には音楽学部有志によるボランティア団体「浜甲カンタービレ」が合唱「歌でスマイルをお届け！」を開催した。

（※2023年に情報メディア学科から社会情報学科に改組）



大森プレゼミ「お菓子でオリジナルブーケ作り」



平井クラス「手作りプラネタリウム」

本稿の記事は本学 WEB サイトの NEWS 及び学科オリジナル HP をもとに作成しています。写真はすべて本学 WEB サイト掲載済のものです。

ご意見・質問等は、本館5階 社会連携推進課まで担当：西垣（6213）

E-mail: shakai@mukogawa-u.ac.jp

〈持続可能な開発目標（SDGs）の詳細〉

国際連合広報センターHP より引用

https://www.unic.or.jp/activities/economic_social_development/sustainable_development/sustainable_development_goals/



1 貧困をなくそう

あらゆる場所のあらゆる形態の貧困を終わらせる



2 飢餓をゼロに

飢餓を終わらせ、食糧安全保障および栄養改善を実現し、持続可能な農業を促進する



3 すべての人に健康と福祉を

あらゆる年齢のすべての人々の健康的な生活を確保し、福祉を促進する



4 質の高い教育をみんなに

すべての人に包摂的かつ公正な質の高い教育を確保し生涯学習の機会を促進する



5 ジェンダー平等を実現しよう

ジェンダー平等を達成し、すべての女性および女児の能力強化を行う



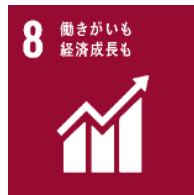
6 安全な水とトイレを世界中に

すべての人々の水と衛生の利用可能性と持続可能な管理を確保する



7 エネルギーをみんなにそしてクリーンに

すべての人々の、安価かつ信頼できる持続可能な近代的エネルギーへのアクセスを確保する



8 働きがいも経済成長も

包摂的かつ持続可能な経済成長及びすべての人々の完全かつ生産的雇用と働きがいのある人間らしい雇用を促進する



9 産業と技術革新の基盤をつくろう

強靭なインフラ構築、包摂的かつ持続可能な産業化の促進及びイノベーションの推進を図る



10 人や国の不平等をなくそう

各国内および各国間の不平等を是正する



11 住み続けられるまちづくりを

包摂的で安全かつ強靭で持続可能な都市および人間居住を実現する



12 つくる責任つかう責任

持続可能な生産消費形態を確保する



13 気候変動に具体的な対策を

気候変動及びその影響を軽減するための緊急対策を講じる



14 海の豊かさを守ろう

持続可能な開発のために海洋・海洋資源を保全し、持続可能な形で利用する



15 陸の豊かさを守ろう

陸域生態系の保護、回復、持続可能な利用の推進、持続可能な森林の経営、砂漠化への対処、並びに土地の劣化の阻止・回復及び生物多様性の損失を阻止する



16 平和と公正をすべての人に

持続可能な開発のための平和で包摂的な社会を促進し、すべての人々に司法へのアクセスを提供し、あらゆるレベルにおいて効果的で説明責任のある包摂的な制度を構築する



17 パートナリーシップで目標を達成しよう

持続可能な開発のための実施手段を強化し、グローバル・パートナーシップを活性化する